(21) 大橋薫「スラム街の社会学的考察」（昭和30年10月・社会事業38巻10号）
(22) 磯村英一「あるスラムの形成と解体」（昭和31年6月・社会事業39巻6号）
(23) 渡辺正治「上野葵町――バタヤ部落素描」（昭和31年6月・社会事業・39巻6号）
(24) 大橋薫「仮小屋生活者の実態」（昭和32年・市政研究3号）
(25) 大橋薫「仮小屋密集地区の実態」（昭和23年7月・社会事業40巻7号）
(26) 磯村英一「スラム――家なき町の生態と運命――」（昭和33年2月・講談社）
(27) 竹中和郎「大都市における地域的病理の分析」（昭和34年・社会事業研究所紀要 vol. 1 第2集）
(28) 大橋薫「都市の社会病理」（昭和35年1月・誠信書房）
(29) 竹中和郎「大都市におけるスラムの社会構造」（昭和35年3月・社会福祉学・1巻1号）
○(30) 石川淳志「スラム居住者の停滞と沈澱」（昭和36年4月・都市問題52巻4号）
(31) 大阪社会学研究会「釜ケ崎実態」（昭和36年5～6月・都市問題研究・13巻5～6号）
○(32) 大阪社会研究会「釜ケ崎実態調査報告」（昭和36年10月・ソシオロジ8巻3号）
(33) 磯村・木村・孝橋編「釜ケ崎――スラムの生態」（昭和36年12月・ミネルヴァ書房）
○(34) 土田英雄「都市社会とスラム――大阪市の場合」（昭和37年3月・大阪学大紀要36年3号）
(35) 東京都社会福祉会館「東京都におけるスラム社会形成に関する研究」（昭和37年3月・同会館）
(36) 磯村編「日本のスラム――その生態と分析」（昭和37年3月・誠信書房）
(37) 大橋「都市の下層社会」（昭和37年6月・誠信書房）
(38) 大阪社会学研究会「大阪市内における社会解体地域の総合的研究――大阪市浪速区恵美地区実態調査――」（昭和38年2～3月都市問題研究・15巻2～3号）

〈関西社会学会第14回大会、シンポジウム報告。「社会問題研究」13巻2号、（昭和38年5月）より転載〉

Ⅳ　スラム現象の基本的視点

「第一次釜ケ崎事件」から五年たった。その後も、いくつかの小さなトラブルは起きているが、他方では、ようやく「スラム」問題への関心が拡がり、世間一般の理解も、事件前に比べれば、いくぶんかは深まったし、また、研究者や官庁によるスラムの調査と研究も、層の厚みを増し、多様になってきた。「対策」の面でも、事件直後にくらべれば、その後は飛躍的展開をみてはいないが、とにかく、いくつかの施設・機関が創設され、現場の担当者たちによって、地味な努力が続けられている。こうした一連の動きは、かねてからスラム問題に注目してきた者にとって、喜ぶべきものである。そして、ともすれば都市行政の片隅に置き忘られがちなこの問題を、あらためて特集テーマとした本誌の編集スタッフに敬意を表したい。

しかし、スラム問題への関心と理解は、今なお決して充分なものとはいえないし、研究者相互の間でも、理論的な食い違いが、かなり根本的な点においてさえ認められる。ましてや、スラムが床屋談義の話題にのぼるときには、いぜんとして誤った俗論が珍らしくないとしても、おどろくには値しない。われわれは、なお多くのキャンペーンをしなければならないのである。この特集を機会として、スラム問題の認識に必要と思われる原則的な諸問題を、あらためて整理し再検討してみることが必要だろう。

この場合、われわれは、まず「スラム」という概念の検討から始めてみよう。というのも、「スラム」概念についての理解は、いくぶんか混乱を示しており、そのことは、とりもなおさず、スラム問題の本質のとらえ方にかかわってくるからである。科学的概念は、単なるコトバの問題に還元されはしない。とりわけ社会科学においては、概念の構成と使用のなかに、研究者の社会認識のあり方と実践的な志向が、鋭く反映せざるをえないのである。もっとも、概念論議は、ともすれば、衒学的なひけらかしであったり、退屈なものであったりする。しかし、やはり、それは、理論的にも実践的にも大切なことなのである。そこで、この小稿では、紙数の制約も考慮して、さまざまな定義の遂一的吟味をやめ、また事実の具体的例証も最少限にとどめながら、「スラム」概念の構成にさいして念頭に置くべき若干の基本的な前提だけについて、論ずることにする。

一、スラム概念の歴史性

「スラム」という概念はなによりまず、歴史的な概念である。それが生まれたのは、一定の社会の一定の時期においてであった。これまで幾度か指摘してきたように、slumという英語は、そんなに昔からあったわけではない。それが書物の中に初めて現われるのは、一八二五年のことである。ここで重要なのは、この時期が、イギリスにおける産業革命の完成期＝資本主義の確立期にあたるという事情である。このことは、スラムと呼ばれる一つの社会現象が、それ以前には、まだ発生していなかったことを推測させる。もちろん、スラムという概念が形成

されるより前に、スラムの実体は存在していたにちがいない。しかし、かりに、スラムの萌芽が、すでに一八世紀には発生していたとしても、それが急速に成長し、「確立」したのは、一八三〇年代と考えるべきだろう。また、じっさい、このことは、イギリスの社会経済史的研究によって、裏づけることができるのである。

つまり、スラムは、「近代」の現象であり、近代社会の成立と同時に生まれたものである。この意味で、いかなる時代にもスラムが存在すると考えるような、いわば超歴史的な把握は正しくない。スラムを、単なる極貧者の集中居住現象とみなして、社会の歴史的発展段階とは無関係に普遍的に存在すると考えることは、その本質を見失う危険におちいるのである。もちろん、極貧者の群れは、古代にも居たし、「木賃宿」に類するものも中世にはすでにあった。また、ヨーロッパで古くから差別の対象とされたユダヤ人地区「ゲット（ghetto）」は、イタリアにおいて一六世紀ヴェネチアに形成されていたし、日本の「穢多村」や「非人宿」は、封建権力によって早くからつくられていた。しかし、スラムは、近代社会以前には存在しえなかった。なぜなら、スラムと呼ばれるような地域に住まねばならないような大量の人間が現われるためには、一定の特殊な社会経済的条件――つまり、農民層が分解して労働者階級が発生し、資本主義的生産関係が確立するということが、必要だったからである。しかも、逆に、資本主義的生産関係が確立した社会ではどこでも、イギリスにおいてスラムと呼ばれるものと同一の現象が、きまって発生した。それらは、最初は、それぞれの社会に応じた特別な名称で呼ばれていたが、イギリスのスラムと本質的に異なるところがなく、また、資本主義がイギリスにおいてもっとも早く確立したのみならず、英語が一つの国際語であるために、スラムというコト

バが広く用いられるようになり、一般化されたのである。スラムというコトバそのものがポピュラーになるのは、たとえば、アメリカでは一九世紀の末であり、日本では第二次大戦後のことだが、スラム現象の実体は、それぞれの社会における産業革命の完成とともに、つまり、アメリカでは一八六〇年代、日本では一八九〇年代には、すでに形成されていたと考えてよい。もっとも、英米文化の影響が比較的に弱いヨーロッパ諸国では、スラムというコトバは、あまり使われない。しかし、それらの社会でも、スラム現象の実体が、資本主義の確立とともに形成されたことは、云うまでもない。

こうした意味で、スラム概念は、資本主義社会の全範囲内では、一つの一般概念としての妥当性と有効性を、持つことができるのである。ただし、わが国の「未解放部落」のように、近代以前の身分差別に起源をもつものは、今日では、資本主義的生産関係によって温存・維持されており、内部的構成と外面的形態の両面においてスラムと似通い、またスラムと統一的に把握さるべき側面を持つが、歴史性をもった狭義のスラムとは区別したほうがよい。

二、体制的所産としてのスラム

さて、このように、スラム概念が資本主義社会の確立に伴って生まれた歴史的概念であり、資本主義生産関係が、スラム現象の発生の必要かつ充分な客観的条件であるということは、とりもなおさず、スラムが、特定の社会体制の必然的所産であることを、意味している。つまり、スラム概念を、歴史的に適用することと同じく、超体制的に適用することもまた、正しく

ない。じっさい、「スラムは、すべての資本主義社会に発生するが、いかなる社会主義社会でも存在を許されないという意味で、資本主義体制に固有な現象なのである。」もっとも、社会主義体制のもとでも、少なくともその初期においては、スラムの存続はありうる。しかし、永きにわたって植民地として苛酷な搾取と収奪の対象とされ、またぼう大な貧困階層を抱えてきた中国やキューバにおいてさえ、社会主義政権はいち早くスラムの解消に着手したし、また、「社会主義体制は、スラムの解消を、原理的に可能かつ必要とするのである。だから、実は、スラム概念が資本主義体制に固有であるということは、それが、資本主義とともに生まれたと同時に、資本主義とともに消えるという、二重の意味での歴史的概念であることを含むのである。」

「スラムが、資本主義的生産関係と、シャムの双生児のように相伴っているということは、歴史的事実であり経済的現実であるのみならず、理論的法則でもある。」そのことは、すでに早くマルクスの「相対的過剰人口」の理論によって、間接的に論証されている。というのも、たとえ彼がスラム現象に直接は言及していないにしても、スラムに居住すべき貧困者人口の造出にかんする資本主義的法則の普遍性を、見事に解明しているからである。「スラム問題の本質が、スラム住民の発生を必然的たらしむる社会経済的メカニズムの矛盾にあるということは、今や、一つの常識でさえなければならない。」こうした見地に立てば、「スラムの原因を体制だけによって説明することはできない」といった議論は、問題の本質をそらしてしまう危険を持つといわねばならない。というのもむしろ強調さるべきは、「スラムが資本主義体制に固有な現象であるということであり、歴史的概念としてのスラム概念は、そのなかに、スラム一般の発生の根本原因にかんする認識を伴わねばならないからである。」このことは、理論的かつ実践的

な原則上の問題にかかわっており、スラムの原因を体制に求める場合は、スラムの研究が、資本主義体制の批判と変革という実践的な課題に結びつかざるをえないし、逆にそうでなければ、改良主義への志向にとどまらざるをえないであろう。もちろん、この事情は、スラム研究のみならず、社会問題一般とその社会構造的基盤の認識にかんして、共通にあてはまるのである。

三、スラムと外部の連続性

このように、スラムを資本主義体制の必然的所産としてとらえるとすれば、それは、単なる局部的現象としてではなしに、いっそう広汎な社会問題の一環として、位置づけられねばならない。スラムが、とくに問題とされるとすれば、それは、体制の構造的矛盾の集約的表現であり、いわば社会問題の結節点であるからにすぎない。スラムが存在するのは、そこに住まねばならぬ人間が存在しなければならず、逆に云えば、スラムが消滅するためには、スラム住民と新たな流入人口の給源が、消滅しなければならないのである。ところが、実際には、資本主義体制の内部では、貧困の再生産がたえずおこなわれており、また、失業・倒産・災害・事故・疾病その他の多様な形態をとって、極貧層への転落とスラムへの流入のための直接的契機が存在している。とりわけ、現代日本についていえば、ぼう大な半失業者の群れが慢性的に汎在し、しかも、最近の数年間というものは、高度成長政策の破綻のもとで、物価が高騰することによって、勤労大衆の生活が急速に不安と破壊にみちびかれつつあるのみならず、企業の「合

理化」がたえず失業者を排出せしめ、倒産は激増して毎年記録を更新し、炭鉱の斜陽化と農村の窮乏は、大都市底辺の労働市場への流入人口を増大せしめつつある。つまり、スラム人口の給源は断たれず、貧困者をスラムへ向かって押し出す一種の斥力が、つよく作用しているのである。

このように考えるなら、スラムとその住民を、それを取りまく「外社会」から断絶した異質で特殊な存在として強調することは、誤りといわねばならない。もちろん、とりわけ「ドヤ街」を中核とするスラムの場合には、若干の特殊な問題がある。しかし、それとても、結局はいっそう広汎な一般的問題＝全社会的な問題に結びついており、スラムの内部だけにあって外部にまったく存在しないような問題は、ないと云ってよい。このことは、アメリカの場合についても、同様である。もちろん、アメリカのスラムは、人種差別——とくにニグロ問題と深く結びついている。しかし、スラム問題は、やはり、「貧しい白人」をも含めた広汎かつ深刻な貧困問題の一環にほかならず、労働問題——とくに不熟練労働者や失業者の問題や住宅問題一般と、交錯しているのである。ましてや、アメリカほどの階層間格差のない日本においては、スラムの内部と外部の間に、質的な断絶を見出だすことは、いっそう困難である。じっさい、生活被保護世帯の周辺を厚いボーダーライン層が取りまいているのと同様に、スラムの周囲には、いわば「準スラム」的地帯が拡がっている。だからこそ、生活保護基準の引き上げが渋られるのとよく似た意味で、局限された地域を対象とするスラム対策は、「同和地区対策」の場合よりもいっそう大きな技術上の困難があるわけである。というのも、なぜ、ある小部分だけをとくに選定するのかという行政上の根拠が、一般市民に理解されにくく、ともすれば、対策

の「不公平」についての不満と非難の声が、あげられさえするからである。したがって、こうした日本の現実においては、とくに、スラムを「外社会」との連続性においてとらえ、また、つねに、母胎たる社会の全体的構造の有機的な一部分として位置づけることが、重要とならざるをえない。また、こうした認識が広く一般によってなされてこそ、スラムに対する好奇な眼やセンセーショナルな取り扱いが、影をひそめることになるだけでなく、貧困を基軸とするさまざまな社会問題の全社会的規模における解決のみが、スラム問題の解決の基本的前提をなすということも、はじめて理解されるのである。この意味で、スラム問題は、国民大衆全体の生活不安・生活破壊の問題にほかならない。

四、スラム現象の相対的独自性

しかし、スラムを全社会的コンテクストにおいて位置づけ、外部との連続性においてとらえるということは、スラム現象の相対的独自性の無視を意味するわけではない。さきにふれたように、それが資本主義体制の構造的矛盾の反映たる社会問題の「結節点」たるかぎりにおいて、やはり、特別の関心と扱いを必要とする。また、じっさい、スラムを他の地域から区別せしめる基本的な特徴というものはある。そうした特徴をどうとらえるかによってスラム概念の定義も異なるわけであり、論者によっては、住民の心理的特質をも含める場合もある。しかし、スラム概念の構成要素として、あまりにも多くのものを含めることは、かえって議論の混乱を招くし、その条件のすべてをみたす地域を見出だすこともむずかしくする。むしろ必要

なのは、もっとも基本的なメルクマールを限定することであり、ひとしくそれをそなえている諸地域の間でいかに形態上の不一致＝多様性があろうと、そのようなことは、二義的な事柄でしかない。

この意味でのスラムの基本的メルクマールは、（資本主義体制の歴史的所産として形成された）「極貧者」の「密住」という一点につきる。それ以外の要素をスラム概念のメルクマールの中にふくめることは、いたずらに混乱をまねき、本質を見失わせるだけである。もっとも、「極貧」といい、「密住」といっても、それは結局相対的な問題であり、絶対的な妥当性をもって境界を設定することは困難である。しかし、そのような地域的境界を設定することは、理論的見地からすれば、そもそも重要なことではない。もちろん、行政上の実際的な要請からすれば、なんらかの根拠にもとづいて、一定の節囲を特別の対象として定めることは必要な場合があるし、それは、詳細な実態調査にもとづいて諸指標を比較することによって、ある程度まで可能となろう。しかし、なにより重要なのは、スラムの地域的範囲の境界を設定することではなく、むしろ、極貧者の密住地域がとにかく存在し、またその周囲を厚い貧困者層が取りまいているということであり、そうした現象の研究を通じて、社会の全体的構造と、その内部における貧困の再生産メカニズムを、いっそう明確・詳細に追求することなのである。

こうした観点に立って、極貧者の密住地域としてのスラム現象を認識する場合、まず第一に問わるべきは、その内部的構成――とりわけ住民の階層的構成である。というのも、資本主義的生産関係は、たえず貧困者を広汎に再生産するが、とくに「極貧者」の地位におちいらざるをえないのは、いくつかの特定の階層であり、そうした階層を再生産する体制的メカニズムが

ある限り、極貧者もまた再生産されるからである。云うまでもなく、こうした意味での極貧層は、とりもなおさず「相対的過剰人口」にほかならないのである。この点で、スラム問題は、社会問題の基底ともいうべき労働問題――とりわけ低賃金と失業の問題に直接結びついている。

また、第二に問わるべきは、極貧者の密住地域の外面的形態――とりわけ住民の居住形態である。なぜなら、住居は生活の全構造にとって基本的な意義をもち、貧困は、劣悪な居住条件のうえに直接的に反映するが、極貧者の就業と所得の形態は、所得と住居の水準を規定せざるをえないからである。この意味で、住宅問題は、スラム問題の基底ではないにしても、やはり、第二の柱をなしている。

この二点――住民の階層的構成と居住形態こそが、スラムの一般的および個別的な特徴を基本的に規定しており、他の諸問題――たとえば流動形態・近隣関係・家族関係・消費形態・消費水準・健康状態・意識形態などは、副次的でしかありえない。もちろん、それらの点でも、スラムは、外部の社会に対して相対的な独自性をもちうる。しかし、それを過度に強調することは、しばしば、スラムの原因さえも、「性格」や「心理」といった個人的なレベルの問題に還元してしまい、社会体制的基盤と歴史性や、スラム問題と全社会構造的問題の連続性を見失った俗論に堕してしまうのである。

五、スラム形態の多様性

しかし、極貧者の密住地域といっても、その具体的な存在形態が多様であることは、云うまでもない。それぞれのスラムは、住民の階層構成においても、居住形態においても、またその他においても、多少とも相違を示している。このようにスラムの具体的な形態を規定するものは、第一に、その母胎をなす社会における資本主義の歴史的発展段階と個別的発現形態である。たとえば、同じく資本主義社会ではあっても、産業資本の成立期と独占段階とでは、また、同じ独占段階の社会でも、それぞれの国の間で、スラムの存在条件は、客観的に異ならざるをえない。だから、たとえば、同じイギリスのロンドンをとってみても、エンゲルスが「イギリスにおける労働者階級の状態」の中で描いた一八四〇年代のスラムと、ブースが「ロンドン民衆の労働と生活」で報告している一八九〇年代のそれとでは、大いに異なっている。また、横山源之助の「日本の下層社会」に描かれた明治三〇年代の東京の「貧民窟」と、大正時代の官庁報告に記録された「細民街」の状態とでも、かなり大きな相違がある。さらに、同じく高度の独占資本主義国であっても、アメリカのスラムでは、日本やイギリスの場合と異なって、人種問題が大きな意味をもっており、それも、初期にはヨーロッパ下層移民が、最近では大都市に流入するニグロがそれぞれ、中核的な要素となり、歴史的な変化を示している。

スラムの具体的な存在形態は、こうした体制的条件によって基本的に規定されるだけでなく、副次的には地域的条件によっても規定される。一定の歴史的段階にある一つの社会の内部でも、また一つの都市の内部でも、地域の人文地理的・社会経済的環境によって、スラムの規模と形態は異なりうる。たとえば、現代日本にあっても、とくに臨時・日雇労働力への需要が大きい巨大都市では、農村地帯からの流入地点にも工場地帯や港湾にも近く、また盛り場にも

近い地域には、「ドヤ街」が形成されやすいし、また、それが旧遊廓やその他の遊興飲食のような風俗営業地域に近ければ、反社会的分子のドヤ街への混入の可能性は、いっそう強まる。また、河川や道路、住宅街やビル街は、スラム拡大を阻む障壁となりやすいのに対して、規制と看視が行き届かない場合は、堤防沿いや高架下や空地がバラック街の形成にチャンスを与えやすいし、一般に、近代以前からの被差別人口の居住地域の近辺や、低湿地その他の自然地理的条件のハンディキャップによって地価・家賃の安い地域に、貧困者が集中的に居住しやすいことも、周知の通りである。

こうして、スラムの具体的な存在形態は、社会的条件―とくに体制的条件と地域的条件の組み合わさり方によって、規定されている。そうした規定は、同じ極貧者でもどのような階層が中核をなすかということだけでなく、どのような家屋が中核をなすかということにも及んでいる。居住形態を構成するもっとも重要な要素としての家屋形態も、それぞれの社会の伝統的生活様式によって一般的な規定を受けるだけでなく、体制的条件によっても規定されるのである。というのも、それは、一つの物的存在たるにとどまらず、一定の所有関係・建設費用・賃貸料・使用目的などを伴っており、したがってそれが建設された時代とそこに居住する者の階層と無関係ではありえないからである。しかし、家屋は、比較的長期間にわたって存続しうるから、同一のスラム内部に、歴史的時期を異にするいくつかの家屋形態が複合的に共存する場合も、少なくない。したがって、バタヤ―バラック街のように、住民と家屋の両面において同質的なスラム形態は、むしろ例外的であり、ふつうは、むしろ一定の階層とそれに対応する一定の家屋形態をいわば〈スラム核〉とする混合型の形をとっている。たとえば、「愛隣地区」

の場合は、日雇―ドヤ街を核とする混合型のスラムといえよう。

こうして、スラムには、多様な形態があることになる。この意味からすれば、ドヤ街はスラムではないなどという説は、ナンセンスな俗論と云わねばならない。そのようなことよりも、重要なのは、むしろ〈ドヤを核とするスラムが、特殊な一形態として存在し、それを生み出し養い続けているのが、現代日本資本主義の体制的メカニズムであり、また、そのもとで無規制街に肥大しつつある巨大都市なのだ――ということを認識し、スラム問題を、国民大衆一般をおびやかす生活不安と生活破壊の一環として把握することなのである。〉そうした理解のうえに立って、われわれは、全社会的規模での貧困とのたたかいと、それぞれのスラム形態に応じたキメこまかい対策の両レベルにおいて、実践的な解決をめざしてゆくことができるし、またそれが必要なのである。

この意味で、「愛隣地区」＝「釜ヶ崎」問題は、いわば象徴的な意義を持っている。それは、スラム問題一般の個別的発現形態の一つであり、特殊性をも持っているが、日本の貧困の巨大な結節点であるかぎりにおいて、「釜ヶ崎」との理論的実践的な取り組みは、貧困を中心とする現代日本の社会問題との対決にとって、重要な戦略的価値をもっている。というのは、それが、第一に、現代日本資本主義の構造的矛盾を直接的に反映して、全国から流入し、定着あるいは通過する失業者・半失業者の巨大なプールをなしており、第二に、それに対処すべき自治体行政の無能力と、独占資本と「癒着」した政府の怠慢を客観的に証拠だて、第三に、こうした経済的・政治的機構に寄生する底辺的形態としての合法的または違法的な営業を成立させているからである。それは、住民構成における日雇労働者、家屋形態におけるドヤを中核とす

る巨大混合スラムとして、農村問題・炭鉱問題を背景とし、下請問題・労働問題（とくに日雇・臨時工・社外工問題）・零細企業問題・住宅問題・風俗問題（とくに犯罪・非行問題）・教育問題・老人問題・衛生問題など、ほとんどあらゆるカテゴリーの社会問題を複合的に背負っている。したがって、「釜ヶ崎」の解剖は、日本社会そのものの解剖の有力な拠点となり、その治療は、「病める日本」そのものの体質改善＝体制変革への橋頭堡となるものでなければならない。もし、それを単なる局部的な異常現象としてのみとらえたり、また、単なる対症的療法だけをもって事足りると考えたりするならば、「釜ヶ崎」問題の象徴的意義を見失い、同時に、それが一環をなしているスラム問題一般を、社会問題全体の中に正しく位置づけ、社会の全体制的構造の根本的矛盾の所産としてとらえることは、できないのである。

〈「都市問題研究」、一九二号、（昭和41年12月）より転載〉

第三部

都市問題の基底と背景